日本国召喚　ダーレクの脅威

おは

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

別の宇宙から全生命体の抹殺をもくろむ危険な生命体がやってきた

日本国とその同盟国はこの脅威に打ち勝てるのか！

目次

資料　魔王領の階級とダーレク階級 ―― 1
プロローグ ―― 4
トルメスの戦い ―― 10
敗北者達1　トーパ王国 ―― 15
敗北者達2　日本国　??? ―― 20
敗北者達3　パーパルディア皇国 ―― 25
交渉1 ―― 30
幕間　マラストラスの計画1 ―― 36

資料　魔王領の階級とダーレク階級

魔王領の階級

魔王　ダーレク

魔王領の指導者にして諸外国から魔王と呼ばれているダーレク

神々の認識後内政にかかわらなくなっている

魔王の僕　マラストラス

魔王が内政を任せて魔王領のほぼすべてを支配することになった

魔王が進めている巨大建築プロジェクトのノルマを伝えられる立場

ノルマが達成できないと粛清される

最高評議会員

建築プロジェクトを円滑に進めるために魔王の許可の元

元囚人の中魔力の高い人物を集めて作られた。

忠誠心と引き換えに評議員の属する収容所の待遇改善がなされる

彼らは複数の収容所の管理運営を任されている

ノルマが達成できないと粛清される

所長

強制収容所の最高階級

生産体であり収容所である施設の生産ノルマの向上を主な責務としている

独創的なやり方によってノルマを大幅に超えることできた時に最高評議会員に任命されるこの際もっとも生産性の低い評議員が粛清される

監督

生産体の生産物を管理指導をするための役目

彼らにもノルマが課されておりノルマを達成できないとと粛清される

囚人

魔王領のほぼすべての住民が属す

ノルマを果たすために心身の限界を超えた労働を課されている

ノルマが達成できないときにはほかの階級と違って罰を与えられるだけで済む

ダーレク帝国の階級
マラストラスを含めて魔王領の住民はダーレクを魔王個人の名前とみているがダーレクとは種族の名前である。現在帝国はタイムロードと呼ばれる先進的な種族と次元と時間を超える戦争通称タイム・ウォーを戦っている

ダーレク皇帝
ダーレク帝国すなわちダーレク全体の指導者である
通常ダーレク帝国内の最も年老いたダーレクが最高評議会の支持を得てこの階級に上る現在１０００万隻艦隊と共に時間の狭間で戦争の指揮を執っている
スプリームダーレク
ダーレク皇帝の名のもとに最高評議会を構成するメンバー通常彼らはダーレク軍の最高指揮官ででもありダーレクのすべての生命に対しての戦争全体の指揮を執る。また皇帝が不在の時は彼らがダーレク全体の指導者となる
タイム・ウォーではある一つの宇宙のすべての時間と事象コントロールする役目を持っている
ダーレクコントローラー
ダーレク軍の個別の作戦の指揮をする階級
タイム・ウォーでは特定の事件を扱っており戦争を優位に変えるべく
事件の内容をダーレク優位に現実改変する作業を行っている
ダーレクセクションリーダー
ダーレク軍の部隊の指揮をとる階級
ダーレクコントローラーの指揮のもとある時間に実在して作戦行う

ダーレクドローン

ダーレク軍の兵士相当する階級。魔王もこの階級

戦場での戦闘を主な役目とする。タイム・ウォーの中無限によみがえる

消耗品としての扱われ方をされている

プロローグ

宇宙、パラレルワールドその時間のすべてが戦場となっている大戦争から一体の兵士がある破れた宇宙から零れ落ちていった。
兵士はこの世界に降り立つと目の前にいた生きるのに値しない生物とそれに群がる生き物をすべてを抹殺した。（死体から情報を抜き取るとそれがこの世界にかつてあった劣等種によって開発された
粗悪な生物兵器とその護衛と兵士たちであることが判明）
兵士は情報を手にれるとこの場所に戻ってきたマラストラスと名前の劣等種を僕にし
部隊の再編計画を始めることにした。

中央歴１６３９年１２月５日　トーパ王国　世界の扉

「ダーレク様、あれが『世界の扉』グラメウス大陸とフィルアデス大陸を隔てている要塞です」
マラストラスは『ダーレク』と呼ぶ青銅色の醤油瓶型の物体に伝えた。

「ダーレクハ情報を知ッテイル」
ゴーレムは甲高い無機質だが侮蔑を含んだ声色で返答した。
「申し訳ありません、ダーレク様」
そう答えたマラストラスだが心の中では怒りの炎が燃え上がった。それもそのはずである、
ダーレクは彼の同僚のオーガ達、復活を待ち伸びた真の魔王ノスグーラを殺した張本人なのだから。
それと同時に魔王軍を崩壊したその恐るべき力の計り知れない恐怖が彼の怒りを抑え込んだ。

「敵ノ防衛設備ヲ発見、脅威度ナシ抹殺セヨ」
その言葉と同時に放たれたビームによって城塞は守備兵もろとも崩落した。

その光景を見たマラストラスはダーレクには逆らえないことをまたしても思い知るのであった。
「マラストラスゴブリンノ群レト共ニ、トルメスニムカエ。ダーレクハ敵ニ降伏をツゲル」
「わかりましたダーレク様」
兵士は浮き上がりトルメスに向かった。

中央歴１６３９年１２月５日　城塞都市トルメス　領主の館
「降伏セヨ」
新年の祝いを話題にしていた平穏な日常は場内の謁見室に屋根を破壊して入ってきたダーレクによって断ち切られた。
「貴様、何者だ！」
突然の侵入者に領主の護衛の騎士は青銅色のゴーレム対して剣を向けた。
「群レノ長にダーレクハ告ゲル、降伏セヨ。降伏セヌ物ハ抹殺サレル」
ダーレクは剣を向けた騎士にビームを浴びせ騎士は絶叫を上げながら倒れた。
当然のことながら領主はダーレクの脅迫を無視して場内のすべての兵士に戦闘をすることを命じた。

兵士はこの行動を劣等種によくある行動としかとらえていなかった。彼らの種族の目的のダーレク以外のすべての生命の抹殺に伴う軍事作戦には同じような行動が無数に存在していたからである。
領主の命令に応じて騎士たちはダーレクに挑みかかったが、ダーレクに武器を振った瞬間に透明な
何かに阻まれるとそこから出た炎によって彼らの体は炭と化してしまった。
「抹殺セヨ!!!」
その絶叫とともに放たれたビームは場内の人々を薙ぎ払っていた。
兵士は生きているものが一人としていない館に満足感を覚えた。
当初の目的である、労働力の確保には失敗したがこの場所に無数に

倒れている
死体を利用すれば魔獣の確保は容易であることはしていた。
何よりも墓場と化した屋敷の姿がダーレクの究極の目的の理想の姿なのだ。
いずれこの屋敷のようにこの星にすべての劣等種が横たわっているだろう
その次はこの宇宙、そしてすべてを抹殺する。その暁にはダーレクの理想郷が誕生するのだ。
トルメス守備隊は魔王様の軍勢のようにすべて殺されたか・・・我の選択は正しかった。
マイトラスがトルメスに足を踏み入れた時にはダーレクによってトルメス守備隊は壊滅。
わずかに生き残った者が王都に悪夢の知らせを知らせることになる。
中央歴１６３９年１２月８日トーパ王国　王都ベルンゲン　ニーベル城
「この知らせはなんだ、余に対する侮辱か」
あまりにも荒唐無稽な報告に国王は自分に対する愚弄ととらえ激怒していた。
だが、国王の剣幕のにもかかわらず重臣の誰一人も国王に加わらなかった。
なぜらなら重臣たちはすでに国王に力ずくでも援軍要請を行わせると結託していたからだ。
彼らは前日に行われた会議によってダーレクに対抗するためには代価がトーパ王国の属国化であるとしてもパーパルディア皇国援軍要請が必要だと認識していた。
「陛下、残念なことに冗談ではありません。トルメス守備隊の敗残兵から本物の報告です。またトルメスの近隣の町の避難民も同様のことを申しおります。我が国はダーレクを名乗る魔獣の攻撃を受けているのです」
国務大臣はこれは冗談ではなくと国難であると伝えたのだ。

「我が国を襲っているダーレクという魔獣について何か知っていることはあるのか？」
国王は国務大臣の話に乗った。国王は大臣の話を信じたわけではない、想定される二つの国難のうち、国務大臣がすべての重臣の賛成を得て王族に反逆する国難と、未知の魔獣の襲撃のという選択のより楽な方を取った。

・人語を解する知能
・飛行能力を有し対抗することが不可能
・近接戦闘は自殺行為
・強力な魔法攻撃を持つ
・強力な魔法防壁を持ちこちらの攻撃を無効化

「わが軍では魔獣に対抗することは不可能です。パーパルディア皇国の援軍がなければ我が国は滅亡するほかないでしょう」
「もし、パーパルディアに援軍を要請することを断ったらどうする？」
「その場合は、陛下にはしばらく休養を取ってもらうことになります」
皇国の監察軍を退けた日本国の参加を条件に国王は提案を了承した。
この会議をもってトーパ王国の権力は重臣たちの評議会へと移り
トーパ王国はパルパティアと日本国に派兵を求めた。

中央歴１６３９年１２月９日　パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第３外務局
「なるほどな、トーパ王国は我がパーパルディア皇国の属領になるということだな。
よい判断をした、我が皇国軍に将来の繁栄は間違いない」
トーパ王国の外交官を迎えたのは本来であれば迎えるはずのない皇女レミール。
彼女がなぜこのようなことをしていると彼女を皇妃に迎え入れる際の箔づけとして
トーパ王国の併合を実績あたえようとした皇帝ルディアスの意思

が働いていた。
「だが、なぜ文明圏外国の日本にも援軍を頼んだのだ？皇国の力を試しているのか!!」
監察軍の愚か者どもめが。あ奴らの愚行のせいでトーパ王国ごときにすら我が皇国の力を甘く見られるようになった、やはり近いうちに観察軍の粛清と日本に対する行動を起こさねばな。
レミールはダーレクのことを全く考えていなかった。これは皇国人にとっても同じことで
トーパの援軍は考え方による違いはあっても日本に関することが主目的であり
ダーレクなぞは皇国の力を見せつける絶好の対象としかとらえられていなかったが
日本への力の誇示のためにトーパ王国への救援には１５万もの大軍が用意された。

中央歴１６３９年１２月１１日

日本国はトーパ王国からの援軍要請を受託しダーレクを有害鳥獣駆除を名目に海外派兵を決定した。
この後のことを思えば、その魔獣のことをよく調べるべきであった。
しかしながら自衛隊が困っている国を助ける姿はマスコミ受けもよく国民も好意的に受け取っていた
そのうえ日本は異世界に来てから負け知らずであったことがこの軽率な判断下す原因となったのだ。
とはいえトーパ王国から情報はダーレクを無敵の怪物と伝えている点とパーパルディア参加との情報の結果、オペレーションモモタロウに参加する部隊は普通科中隊と支援としての戦車小隊が含まれることになった。
中央歴１６３９年１２月１２日
死の町と化したトルメスのにおいにつられてゴブリンの群れが次

から次へと市内に入ってゆく。
彼らは食料をもたらすダーレクの傘下に入り新魔王軍が誕生した。
「ダーレク様、多くのゴブリンがあなた様の配下につきました。これからは何をなさいます？」
兵士にとって、町に集まったゴブリンは労働力にかろうじて使える存在に過ぎなかったが
一個体としてとして行動するよりも多くの選択肢を与えるのも確かだった。
「労働力ハノ拠点ノ構築ニ使ウ」
「拠点の構築？」
「ダーレクノ決定ハ絶対ダ質問ハ許サレナイ」
「わかりました、ダーレク様」
兵士にとってゴブリンの戦力は無いのと同じであり、戦闘に参加させる代わりに労働をさせる
方が効率的である。との考えを持っているがそのことを伝えるのは同じダーレクであって
マラストラスのような劣等種族はダーレクの命令に従っていればいいのだ。
労働力の課題は解決した結果、構築される拠点の防衛に関しての地峡に住む全生命体の隷属または
抹殺への行動に移せる。兵士の予測では敵の軍勢は再びトルメスを奪還しに来るであろう。
その間防衛を強化し、やってきた敵を撃破し技術、情報、労働力を手に入れる。
それぞれの思惑の元トルメスの戦いは始まろうとしていた。

トルメスの戦い

中央歴１６３９年１２月３０日　トルメス郊外
パーパルディア　トーパ王国救援軍　リントヴルム移動司令部
アロイス・リンツ

フフフフ、フィン王国進攻に入れなかったがトーパ王国救援軍の司令官になれるとは。

レミール様のおかげだな。

フィン王国進攻に加えられなかったという点でこの男の軍事的才能は並以下であった。そんな彼が司令官になれたのは彼が皇族の血を引くこと、そして何よりも皇国がダーレクの駆除を容易と認識していたからだ。

監察軍の連中も自衛隊に怖気づくとは。連中の兵力動員を見れば、わが皇国との国力の差は歴然だ

３００人足らずの連中と１５万人の大軍。どちらが強いかなどはっきりしている。

陸上自衛隊　先遣中隊　１０式戦車内　紀平輝彦

たしかにパーパルディア軍を見るとこの世界で列強と呼ばれることはあるな。

軍の行軍スピードが近世時代の軍にしては早い。

ただ、軍の水準は近世軍だ。自衛隊の脅威になることはないし、彼らと戦争しても楽勝だろう。

パーパルディアが危険な侵略国家であることを異世界の人々は口々に言っていた。

その上にパーパルディア皇国軍と行動を共にするなかでトーパ王国の住民から物資を略奪しているのをを見た。この国は何か大きなことをやらかす。その時は自分たち自衛隊は奴らと戦うことになるだろう。

トーパ王国　トルメス　奪還部隊　騎乗　フランク・ミューア

我らはあの魔獣に勝てるのだろうか?日本の鉄の竜、パーパルディアの力の源リントヴルム、
トーパ王国軍などあっという間に滅ぼす力を双方ともに持っている。
だが、命からがらトルメスから逃げ出したときに見たあの魔獣の力が俺を不安にさせ続けるのだ。
同日　死の都市トルメス　領主の館
兵士の警戒センサーはトルメスに向かう敵の軍勢察知した。
すぐさまダーレク戦闘システムが敵の数、脅威度を推測する。
・数ハ１７万２４７２人
・デマット兵器存在確認サレズ　（存在をこの世界から消し去る武器。例としてレミールに当てると彼女の存在が消えて結果、ニシシノミヤコの虐殺が起きなくなる）
・時間兵器確認サレズ
・時空ノ歪ミ安定的
・・・敵ノ戦力弱小ダーレクノ勝利ハ確実
兵士は郊外へ向けて飛び出す。劣等種族、特にトーパ王国軍を消滅させるために。
１７万の大軍は悠然とトルメスに向かっている。パーパルディアと自衛隊は自分たちが
勝つことを疑っていなかった。方や武力でフィルアデス大陸を治め、方や圧倒的な技術力でロウリアを粉砕した実績が自信を持たせていた。
空を飛ぶダーレクに真っ先に気付いたのはトルメスの敗残兵たちだった。
迎撃にきたワイバーンロードを無視して、地上に降り立つと、
「降伏セヨ」
その言葉に反応したのはパーパルディアの将校だった。
「魔獣が偉大なるパーパルディアに降伏を求めるだとぉぉぉぉぉ・・・」
「ダーレクノ要求ヲ拒否スルモノハ全テ抹殺スル」
将校を撃ち殺したダーレクは冷淡かつ傲慢な反応を返した。

将校を殺されて怒り狂ったパーパルディアの一斉射撃から戦闘が始まった。

強固なフォースフィールドはあらゆる攻撃に無敵だった。
トーパ王国の大魔法、
パーパルディアのマスケットや導力火炎弾、
自衛隊の５．５６ｍｍ弾や対戦車誘導弾そして１０式戦車の１２０ｍｍＡＰＦＳＤＳ弾にも。

紀平は茫然としていた。おいおい、反則だろと。
確かに自分たちはあの怪物に向けてＡＰＦＳＤＳを打ったのだ。１，６００ｍ／ｓ以上の高速弾は運動エネルギーであの魔獣を破壊するはずだった。はずだったのだ。実際の砲弾は魔獣のバリアによって阻まれ、その表面に触れることすらできずに消失していた。
あいつ、俺たちのことを気にもせずにリントヴルムを攻撃している。防衛省の試算と違ってあの地竜は
１０式以上の戦力を持っているのか!?
真実は残酷である。ダーレクが１０式を後回しにした理由は、リントヴルムが生き物でありその上
リントヴルムを殺しても騎乗者が死なない可能性があるが、１０式では死んでしまうからである。ダーレクはこの戦いを娯楽とみなしていた。
目の前で僚車が魔獣に突進する。砲弾が効かなければ自重で踏みつぶす腹のようだ。
初めて魔獣は１０式に攻撃をした。放たれたビームは複合装甲を紙のように突き抜け砲塔が空高く舞い上がった。紀平は１０式戦車から逃げ出した。

先遣派遣中隊は戦場から敗走してゆく。中隊最強の戦力１０式を全く脅威とすら受け取らない。
魔獣を前に逃げ出す兵士たちはロウリアとの紛争を無傷に勝利し

た兵達ではなく、
オペレーションモモタロウの名前の通りの鬼退治の一行ではなく、鬼という怪物になすすべもなく
やられてゆく人々でしかない。
同日　トーパ王国海上　おおすみ
先遣派遣中隊からの連絡は当初の楽観的な予想と違い、援護の要請と死傷者の報告が繰り返しだった。
想像だにしなかったこととはいえ自分たちが彼らを死地に送ったことに動揺している隊員に、艦長からの放送が入った。
「諸君らが思っている通り死地に彼らを送り出してしまった。だが、死地に送り出したということは死地から救い出すこともできるということだ！本艦はこれから負傷者の救助を行う!!」
艦長の言葉のようにおおすみは戦場に向かう。
トーパ王国軍は魔獣の虐殺が始まってからすぐさま逃げ出した。待ち望んだ救援など役に立たないこと、
王国が滅びることを確信した彼らは家族のもとに向かってゆく。家族を連れて魔獣から遠くの場所に
行くことのみが彼らの望みだ。
トーパ王国軍は弱かったわけではない、強いのだ。パーパルディアも日本も同じようにやられているのだから
弱いわけがないアハハ！
笑っているフランクにビームが当たりこれまでに倒れた人々の仲間入りをさせた。
皇国軍もなすすべもなくやられていく。騎乗していたリントヴルムマスケット銃の一斉斉射を物ともせず魔道砲をものともせず魔法の攻撃で皇国軍を打ち破ってゆく。まさに戦場の死神だ。
退却いや敗走しているパーパルディア軍に再び死神の鎌が振るわれ、一個連隊が刈られた。
司令官のアロイスの死も近い。
人は死ぬときに真価を発揮するときがある。コネで出世した無能な指揮官のアロイスは

死が目前に迫った時に無抵抗のまま殺されることを拒否した。武器をなくした彼はせめてもの抵抗に
僅かな宿る魔力を魔獣に当てる続ける。
紀平はアロイスを見ていた。彼自身はパーパルディアの将校としかわからなかったが
その姿が自分達がなっていたものだったのはすぐに分かった。その英雄に魔獣が攻撃の矛先を向けた瞬間。紀平は司令官の盾になっていた。
わ、儂は、蛮族に救われたのか!?あの蛮族いやあの男に・・・
生き延びなければいかんか・・・
パーパルディア軍は撤退してゆく。トーパ王国の属領化とその功績によって皇后になるというレミールの野望は無残にも失敗した。

戦場に残るはただ一つダーレクだ。
自衛隊、撤退ダーレクノ勝利、トーパ王国軍、消滅ダーレクノ勝利、パーパルディア皇国軍、撤退
ダーレクノ勝利。
兵士にとって勝利は当然の結果だった。
米軍と一つのアリの巣ほどのの戦力差で勝たない方がどうかしているのだから。
目的を果たした兵士はマラストラスを呼び命令を下した。
トーパ王国ヲ破壊セヨ

ダーレクの力は計り知れない。太陽神の使いすらほかの連中と全く同じように歯牙にもかけず
撃破した。もしかすると魔帝様ですらダーレクにとっては弱い存在に過ぎないかもしれない。
のちにマラストラスは知るだろう。魔法帝国ラヴァーナル帝国、この世界を支配した強大な帝国をダーレクが資源としてみることを。

敗北者達1　トーパ王国

中央歴１６４０年　１月１４日　トーパ王国　王都ベルンゲン
王都は狂乱に包まれていた。ダーレクによって王国軍壊滅状態
さらに悪いことにトルメス方面から１０万以上の魔獣が南下を始め周囲の村や町を飲み込んでいった。
頼みの綱であった、日本国とパーパルディア皇国は敗北を喫しトーパの地から逃げ出した。
残された王国軍ではその脅威に対抗できないことは明白であったし、仮に全軍無傷であったとしても
無理なことも明白であった。結果として起こった行動は必ず来る滅びに対しての万人の万人に対する闘争だ

「へへへ、衛兵隊も俺たちの仲間みたいなもんだからな自由にやり放題だぜ、魔獣共がやってくるまで
永遠の祝賀会だ」
そういう男は豪商の家に仲間と共に押し入ると豪商を家族なぶり殺しに血の宴を開いていた。
そういった事件がベルンゲンの各地で引き起こされていた。

王城の兵舎というには華美な建物前に１２名の美しい装飾をまとった騎士たちが集まっていた
「王国に滅びの時がやってきている、それも避けられない滅びがだ。王族の方々は無事に他国に亡命
なされた。今、我らが持つ剣は我ら自身の意思の身に従う。そう、王国の最後に我ら護衛騎士団は最後まで戦ったと世界に示すのだ!!」
王国最後の騎士は守るべき民を見捨て己の矜持のために戦う。
すでに王族はは他国に亡命し国務大臣率いる重臣会議がこの国の最高決定機関だ
「魔獣の大軍に対抗する策は、あるか！」
国務大臣は逃げ出していなかった重臣たちを問いただした。その

問いに答える者はいないそもそも大臣自身
が答えが返ってくるとは思っていなかった。この会議そのものが参加者の精神を安定させるために開いていたのだから

マラストラスはそのような惨状は知らず粛々と王都に進軍する。率いる軍勢はこれまでの石槍や棍棒ではなくパーパルディア軍と自衛隊から鹵獲した武器で武装されていた。
もちろん武装の改善を命令したのはダーレクだった。魔獣に武器の使い方を教えるためにとった手法とは
魔王ノスグーラをナノジーンを使い念動波部分のみを復活させ。パーパルディア兵士と自衛隊隊員の亡骸
から手に入れた武器の使い方を念動波を使い刷り込ませた。
死人を復活させられる力か、そんな力神々しかもっていないと思っていた。ダーレクの力には限りがないな
マラストラスはダーレクに使えてから驚きと疑問そしてその強さを実感する日々であった。

魔獣軍はベルンゲン近郊に到着し混乱に包まれてあちこちで炎を上げる目撃するなかマラストラスは焦っていた。
まずいぞ人間どもが自滅をし始めた。ダーレクが我を派遣した理由はトーパ王国の住民の確保だというのに
早く軍を突入させなければ。
兵士は別に住民を保護するつもりは全くない。標準的なダーレクである兵士は異種族に対する深い憎しみで
でいており、できることならこの惑星のすべての生命速やかに殺したいのだ。だが、兵士の目的である
部隊の再建には労働資源が必要だ。そのためにトーパ王国の住民の確保が必須とされていた。

「魔獣だ、魔獣が来たぞ!!!」
その言葉は混乱していた王都に一種の秩序をもたらした、戦う気が

あるものは魔獣と戦いに挑み
逃げる気があるものは逃げ出していった。
「今だ！敵の魔将に突っ込め」
トーパ王国軍の騎士の一団がマラストラス目掛けて切り込んでゆく
彼らの目算では護衛のゴブリンどもは騎士の攻撃を見れば途端に逃げ出し、不意を突いた魔獣軍の指揮官は簡単に打ち取られる。その時騎士たちの名前は永遠に残るだろうと
だが護衛のゴブリンたちの反応は素早かった。騎士たちの予想とは違い彼らは同胞にように逃げることはなく装備された８９式小銃は騎士たちの鎧を簡単に貫き無謀な襲撃を終わらせた。
なぜ護衛たちは逃げなかったか、それは念動波によってダーレク自身の異様な戦闘精神（戦闘をしていないときは自分の戦闘精神と戦闘をしている）を付与されていた。

太陽神の使いが持つ武器の威力はすごいな。トーパの残党どもをあっという間に無力化か
もしも、ダーレクの元ではなく魔王様の元で戦っていたら死んでいたかもしれないな。
やはりダーレクに使えたことはよかったのだ。
「さぁ、ゴブリンども我に続け、この国の国王の顔を見に行こうではないか、ホッホッホ」
ダーレクについてい行く限り自分の前にあるのは勝利の光景だ。

国務大臣は王城のバルコニーの端に立っていた。目の間に映るのは大量のゴブリンが王都中に
散らばってゆく恐るべき光景だった。その光景を前にして国務大臣は地上へと身を投げた。
国を守るためにあらゆる手段を尽くそうとした男の命はここに散った。後世の評価ですら
トーパ王国の国民がこれからたどる末路から見て。評価すらされ

ないだろう。
王宮に入城した魔獣軍は場内の人々が選んだ運命。集団自決を行って全員死んでいるのを確認した。
ダーレクによって食欲を抑えられているゴブリンたちは遺体を食べることはなかった。
人間ども全員死んでいるな、市街の人間は・・・確保されているな。
「ダーレクハ、結果ヲ了承スタ」
マラストラスが驚いて振り向くとそこには青く光る眼をした護衛が立っていた。
「ダーレクハ、選別ノタメニ町ニクル、オマエハ住民ヲ王宮ノ前デ集メロ」
そう言い終えると護衛の目から青い光が消え、キョロキョロとあたりを見渡していた。
マラストラスは直感的に護衛にはもう一つの役目、自分を監視することもあることに気が付いた。
ダーレクについていけば勝利は思うままだろう、だがダーレクの要求した基準を満たさなければ
待っているのは生命としての敗北だ。
降伏したベルンゲン住民たちの前にダーレクが降下してゆく。住民たちは醤油瓶型の悪名の高さに反して
意外なほど素朴な姿に驚くとともにこれからその見た目が恐怖のアイコンになることを感じ取っていた
兵士は分別のためにここにやってきた、資源としてダーレク帝国に使われるためには
石油をガソリンや軽油に分けるように劣等種も人体実験用に使われるよい遺伝子を持つものと
ゴブリンの繁殖用や労働に使うわるい遺伝子を持つものを分けなくてはならないのだ。
「ダーレクハ分別ヲ行ウ、劣等種ハ分別ニ協力セヨ、拒否スル者ハ抹殺スル」

ダーレクの宣言から恐怖の統治が始まる。
早速ゴブリンたちがあっけにとられている住民たちを痛めつけて命令に従わせる
ゴブリンによってダーレクの前に並べられた人々は、実験体と奴隷に分けられ
奴隷は男は強制労働に女はゴブリンの繁殖用に使われることになる。
実験体はより過酷な運命であり魔法を把握するための実験に新たなる奴隷を作り出すための
異種配合実験に使われることになる。

こうしてトーパ王国はダーレクによって巨大な収容所に作り替えられてゆく
陥落したこの地域は新たなる魔獣の王となったダーレクにちなんで魔王領と呼ばれ
新たなる魔王の誕生を世界中に知らせることになる。

敗北者達２　日本国　???

中央歴１６４０年　１月２日　日本国
自衛隊員１０５名の死亡！
オペレーションモモタロウの誤算

『えー私が思うには、政府の無思慮によって起こされた惨劇ですよ』

日本の敗北が伝わるや否やこれまで自衛隊の活躍やその後押しをした政府を好意的に報道してきた、だがダーレクによって敗北した事実がマスコミ各社に伝わるや否や手のひらを返し

政府批判が始まることになった。

ネットではダーレクに対する報復派と交渉派に分かれて大激論やそれぞれの派閥による人格批判が行われ国会では野党の大批判と日本全体が混乱に見舞われていた。

ある職員はマスコミ対策の支障を作成しながらぼやいていた。

はあーやっぱりこうなるよな、おかげさまで三が日だっていうのにマスコミ対策の対応書類を作る羽目になったぞ。そのうえダーレクに関する資料が全くないのはどうしたもんか・・・

さすがにないからといってトーパ王国から報告をそのまま出すのはまずい・・・ほんとどうしたもんかね。

渦中の人の首相は今回の大スキャンダルに関する情報を防衛省の職員から聞かされていた

・・魔王の脅威は旧世界の中国以上である可能性を提言します。

中国以上!?立った一体がそこまでの脅威だというのか」

「魔王は最も弱いトーパ王国軍を執拗に攻撃していました、我々やパーパルディアの攻撃を

控えてです、ダーレクからみた我々の戦闘能力は非常に低い可能性が高いと思われます」

「我々の攻撃に躊躇した可能性はないのか？」

「戦闘からの報告では我々の攻撃は全く通用していません。ダーレクはこちらを脅威と思っていなかった方が辻褄があいます」
「こ、交渉の余地はないのか、知性があるというらしいじゃないか」
いや、害獣駆除目的で攻撃を仕掛けた相手と交渉するのは相当骨が折れるでしょ
「たしかに、彼らはこちらの降伏を求める応答をしましたが。降伏を求める発音が
魔獣の鳴き声なのかもしれませんし、わが省の見解としては仮に降伏を求める相手と交渉したとして相手の要求は苛烈なものになるでしょう」
おいおい、そんな顔するなよ、トーパの海産資源と自衛隊で支持率上昇を狙ったのはあんただろ。
これまでいいように使ったくせに。この失敗は俺たちのせいだと思っているな
「では、どうやって対抗をするのだ。相手は単体で人民解放軍に匹敵する化け物なんだろう?」
実際対策の方法がないんだよな。魔王の名前が分かった程度では何もできないよな。
「正直に申し上げますと現時点においては対抗策はありません。そこで我々防衛省は政府に
一つの提案があります。魔王と呼ばれる存在に対抗するための政府をまたぐ組織の設立を提案します」
「・・・・うーん。その提案の通り対ダーレクの部門の設立しよう。だが、まずは交渉からだ
これ以上の死者は出せない」
日本政府は対ダーレク部署である特定害獣対策本部の設立、まず手始めとして各国にダーレクに類する情報を求めた。
日本国の実力を調べるためカイオスから派遣された外交官は
日本のニュースによって祖国の敗北を知った。パーパルディア皇国からは魔王のことが何も伝えられていなかったのだ。
外交官は祖国に比べて日本は情報の共有がよくできていることに

感心していた。
パーパルディアは都合の悪い情報を隠蔽する風潮の結果、多大な損失を被っていることを思い知っていた外交官は本国に当てて政府内の情報共有に関する提案を書き上げていた

日本の技術力とそれに裏付けされた軍事力を調べるために派遣されたマイラスに一体の魔獣相手に敗北したニュースとマスコミや野党の連日連夜の批判の大合唱を聞かされることとなった。
日本国の技術と軍事力はムーをはるかに上回るものの兵士の損失に関しては著しいほど批判的であると確認するした。
将来起こるであろう第八帝国との戦争対策で日本国の技術的の支援を仰ぐことは重要であるとともに死傷者に対する国民感情から軍事的支援は直接的支援は望めないであろうとの結論を本国に送った。この報告書で上層部が動いてくれればよいのだが。下手をすれば報告を却下するどころかマイラスをこの国からすぐに引き上げることすら考えられる。
一体の魔獣に敗れたという衝撃的なニュースは国のイメージを決定づける。それもこの世界にとって新顔の国とってはなおさらなのだ。
中央歴１６４０年　１月３日　神聖ミリシアル帝国
ミリシアルの重臣達と皇帝は魔王の出現と列強の敗北に関する話し合いを行っていた

「パーパルディアも落ちたものだな魔獣一体を倒せぬとは第三文明圏程度連中に列強の名前を与えたのが
そもそもの間違いだったのではあるまいか？」
「ラヴァーナル帝国が復活する前に我が国の下で保護する必要がありますな、次の会議では

パーパルディアの列強から追放が目的としましょうか」
「うむ、列強とはいずれよみがえるラヴァーナル帝国に対抗するためにあるものだ。それが
たかだか魔王ごときに負けるなどあってはならない。すでにかの帝国の復活は近いやるべきことをやるのだ」
この日神聖ミリシアル帝国の方針が決まった。先進１１国会議ののち第三文明圏への進駐各国を
支配体制に組み込み兵力、資源を吸い上げそれを元手にミリシアル軍の大軍拡を行う計画が立ち上がった。
???　次元の外側
ゲームボードのように世界を見ている種族がゲームの駒からは神々とダーレクからは旧支配者と呼ばれている彼らは。あるゲームいや、駒のの動きを見物するに遊ぶに熱狂していた。
「ラヴァーナル帝国復活まであと少し。シャマシュのお気に入りとの闘いともあと少しだあ」
「このために少し早めに呼び出したんだからな、負けるにしてもインフィドラグーン並みには戦ってもらわないと」
「またこ奴らが勝つのはつまらん、その時は妾がよいか」
あのさぁ、いくらお気に入りだからってそういうのはやめよう。アスタルテの奴みたいに介入しすぎると
マジでつまらないからさぁ、それに天使たちをもっと強くして。僕たちの遊び相手にするのも楽しそうじゃん」
世界の人々があがめる神々の実態は堕落した高等種族達であった。彼らの遊びのためにこの宇宙が作られ
作られた世界では戦争することは宿命づけられている。管理者として送り込んだ天使たちがラヴァーナル帝国名乗り管理を放棄した事すらも楽しい遊びであり、次の管理者として生み出した竜神たちとの戦争は神々を大いに喜ばせ彼らの反乱を許し滅ぼさないことにしたのだ
「で、シャマシュちゃんのお気に入りの日本はどうなっているかな？予定では今頃パーパルディアと戦争しているはずだよね」

神々は未来を知ることだってできる。もちろん結果が分かっている物語など退屈で仕方がないものだから見ないでいるが
「うーん、負けているよシャマシュのお気に入りそれも魔王なんかに」
世界を覗き込んだ神々の1柱がそう答えると白髪の幼い子供の姿をした神がを荒立てる
「そんなわけあるまい、おぬしたちも見た通り魔王ごとき６０年前の装備で圧倒しているのじゃぞ、何が起こっているじゃ」
シャマシュははるかに力を伸ばした魔王の情報を読み呆然とした。複数の次元という限りなく広い世界を見てもこれ以上の憎悪と自身の種族の優越性を狂信的に持つ種族は存在しない
「だ、ダーレクじゃダーレクがいる」
「あー、ほんとだ。いるよダーレク・・・」
「天使どころじゃねぇ、この次元からさっさとカラビ・ヤウに戻らねぇと厄介ごとにに巻き込まれるぞ」
その言葉を聞いた神々次々と世界を覗き込み。そして恐怖した
宇宙を自らの意思で作り上げるほどに強力な存在が高々一体のダーレクを恐れることなどない惑星を爆散させた後に惑星を元通りにすればいいだけの話である。しかしそれには神々の強大な力の反響がダーレク艦隊にまで届いてしまう。戦力を欲しがっている彼らは次元艦の艦隊を送り込み戦いが始まる。神々ですら次元艦は勝てるかどうかわからない相手なのだ。負ければ捕獲され次元兵器に改造される。
いつものように神々は決断を下すただ1柱日本が好きで好きでたまらない神シャマシュを残して
高次元に向かっていった。かつての天使たちを失望させ反逆者に変えた行為を繰り返すのだった。

敗北者達３　パーパルディア皇国

ダーレク討伐作戦の死傷者は七万人を超え。無敵の皇国軍の失墜を全属州にさらし、虐げられた属領からの不穏な気配が漂い始めていた。パーパルディア政府は武力で抑え込みを図るも神聖ミリシアルからの第三文明諸国の保護宣言。すなわち列強の地位をパーパルディアからはく奪すること、かの国が担っていた第三文明圏の保護の役割を神聖がミリシアル担うという衝撃的な宣言であった。

その宣言はくすぶっていた属領の復讐心に火をつけ大規模な反乱が発生

一か月弱反乱に参加した属領は７３にもなりフィルアデス連合軍を名乗りパーパルディアに反旗を翻していた。

中央歴１６４０年　２月４日　パーパルディア皇国　エストシラント

「現在、ワイバーンによる偵察によれば反徒どもはアルーニ向け進軍をしている模様です」軍最高司令官アルデは皇帝ルディアスに報告する

その顔はこの国を襲う危機的状況によってやつれてはいたがいくらかは持ちなおしていた。彼にとってフィルアデス連合軍は想定ができる相手であり。ミリシアルの魔道軍やいまだに戦力を考えることすらできないダーレクを相手に戦略を今は考えなくても済むからだ。

「不幸中の幸いですがフェン王国進攻が取りやめになった結果。わが海軍によって敗残部隊を速やかに回収することが出来ました」

「敗残部隊で敵軍を消耗させわが軍の主力で一気に叩き潰す、それがわが軍の戦略です。しかし問題が指揮官のアロイス様ですがいかがいたしましょう?」

「アロイスは皇族の血を引きレミールにとって叔父の関係だが魔獣に無様に敗北した。奴は皇族の恥さらしになりさがったここで戦死させた方が奴のためよ」

「反徒どもついてはよい、ミリシアルだ。かの帝国と戦うにはどのよ

うにすればよい」
「まず、反徒どもを叩きのめし大陸では覇権を再確立、その後第三文明圏の国々と大同盟を結びミリシアルの介入の意思を喪失させます」
アルデの発言は異様にプライドの高いパーパルディア人にしては弱腰の発言だったいつものパーパルディアならば文明圏外の国々と同盟という考えすら浮かばない。それが同盟という提案を強硬派の軍部の長が言うのだから神聖ミリシリア帝国の存在がこの世界でどれほど恐れられている証明している。

落ち目の皇国にどの国もつかないだろうとカイオスは推測する。現在の状況がなくとも皇国の外交と内政は諸外国で悪名が高く同盟国を持っていない。むしろ第三文明圏の国々は嬉々としてパーパルディアを解体しに行くだろう。その流れに乗らない国あるというのならばこの世界に来て日が浅い日本だけだ。
「陛下、我が国の同盟国として最適な国がります」
「なに、申してみよ」
皇帝からの問いにカイオスは答える。その国は日本と

2月7日　エストシラント　パラディス城
えらい歓迎の仕方だな　朝田と篠原両名が最近のパーパルディアの歓迎に対して思っていることだそれはより高級なホテルから始まり食事にサービスの水準。彼らを護衛する兵士の登場などや行き過ぎといえるまでの行為。もちろん両名とも断ったが朝田と篠原に対して奴隷の譲渡の提案まで行われていた。
今もその歓迎が行われている外交交渉に呼ばれた二人には皇族専用の馬車用意されていて、その乗り心地は外交官生活で乗った乗用車の中でも上位のものだった。なぜ、ここまでの乗り心地が良いのかと御者に聞くと風の魔法を使い車体を浮かせている、専用の車体と高い工作技術が必要で皇族しか乗れないほどのコストだと、馬車のことを聞いているうちに目的地に到着した。

「朝田さん篠田さんよくいらしゃいました」
カイオスは二人にそう言って握手をした。
最初の会見の日本を見下した態度とは違い対等の国いや歓待ぶりから考えると格上の国を相手にしているほどの変わりようだった。
「カイオスさん、あのご婦人は誰ですか？服装からして高貴なお方と存じますが？」
「ええ、あのお方は我が国の皇族の一員であらせられますレミール殿下です」
「よく参った。私は外務局監査室のレミールだ。今回の我らの提案の重要性からこの交渉に出席している」
レミールの紹介を聞いた朝田はパーパルディアから提案は最重要案件だということは外務局監査室が外務局の上位機関であること所属している人員が皇族であることからすぐに推測できた。
「わが、パーパルディア皇国は貴国との同盟を提案する」
レミールはそう言うと朝田に上質な紙を手渡した。
・パーパルディア皇国と日本国は国交を樹立する
・パーパルディア皇国と日本国は相互防衛条約を締結する
・パーパルディア皇国と日本国はお互いの知りえている技術を開示する
・パーパルディア皇国と日本国はお互いの軍事基地の使用を許可する
・パーパルディア皇国と日本国はお互いの領空領海の解放を許可する
読み終えた朝田はここまでのものが来たか腰を抜かしそうになった。
自分達が政府から期待されていた役割の国交の成立どころかさらに同盟まで提案されたのだから。
政府から提案に対する是非の質問は来るだろうが今は一外交官として回答するのが賢明だという判断を下した
「私の権限では同盟に関する事項は決定できません。一度本国に提案

を送付し政府の決定を伝えます」
「朝田さん、回答にはどれほどの時間が必要ですか?その時間だけ猶予を与えたいと思っています
ただ、わが皇国は近いうちに属領の反乱を鎮圧するでしょう。その時にはこの提案自体がなかったことに
なっているかもしれません、お早目な回答を」
カイオスとしてもこの提案を受け入れるために多大なる労力を費やしていた。成功すれば第1外務局局長にも就任できるが失敗すればいたずらに皇国の国威を貶めた罪で辞職が待っている。だからこそ時間稼ぎは認めない思いも持つ
そんなカイオスの思いを受け取ったのか朝田は
「では一週間後に」
と答えホテルに戻り政府に連絡をすることにした。内心一か月以上かかるじゃないかと思いながら

「カイオスよ、わかっていると思うがあの者たちがこの提案を拒んだ時には外務局いられなくなるぞ」
レミールはそうカイオスに告げた。彼女にとって日本は監察軍を破った忌々しい蛮族国家に過ぎない本音では日本に対して従属化宣言をしたいところだ。その彼女が外交の場で下手に出ざる負えなかったのはトーパ王国での失敗が影響している。その結果彼女の皇族としての立場は著しく傷ついた。
そのうえ彼女の叔父は戦場で近代パーパルディア史上最悪の敗北を喫し皇族から追放された。ここで何かの功績を得なければルディアスとの結婚は白紙のものとなる。幼馴染のルディアスとの結婚をずっと生きる糧にしていたレミールにとってはそれだけは避けなくてはならなかったのだ。
「殿下、ご心配なさらずとも日本国は我らの提案を飲みます。なぜならば現在かの国からは多くの国が大使を引き上げています、現在残っている大使は我が国を除いてはクワ・トイネ公国とクイラ王国そしてロウリアのみです。日本としても列強との我が国との同盟によって

得られる外交的威信は喉から手が出るほど欲しいはずです」
この男そこまで考えていたのか、レミールはただ下手に出るだけの男と考えていたカイオスの評価を少しだけ上げた。その結果彼女はあるものを見せることとした
「実はだな、私は魔獣について調べていたのだがこれは本物だと思うか？」
レミールが机に広げたのはボロボロの布切れだった。布自体ではなくそこに書かれていたものは
カイオスを驚愕させた。
そこには魔獣の姿と古代ラヴァーナル語で書かれた説明文には
『殺戮の神ダーレク』と記されていた。

交渉1

中央歴１６４０年　２月７日　日本国　首相官邸

「パーパルディアから同盟の提案だと!?」

日本国のほとんどの人によってパーパルディアは悪の帝国であり閣僚の中には

いずれ戦う相手と読んでいた。その国が同盟を求めてきたのだその内容も対等な関係でこの案だけを見れば

結びたくなるような案を

「パーパルディアと同盟を結ぶのは現在の外交情勢を考えればよい案かと」

オペレーションモモタロウの失敗後第二、第一文明圏駐日大使が続々と母国に帰還する事態が起こっており

それに拍車をかけるようにミリシアルの第三文明圏の保護宣言は第三文明圏の国々までもが国交を断絶するありさまとなっていた。

「現在の状況が続けば経済においても日本製品の輸出の大きな障害となりひいては

経済の悪化を招くことになります。ですから私としてはこの世界での列強であるパーパルディアと手を結び

外交的立場を再確立する必要性を感じています」

外務大臣が言わないであろう理由には日本との外交を取りやめる国々が続出した結果

外務省の力が失われてしまうのでは?という外務官僚の疑念を大臣が受け取ったという理由もある

「私は反対です、パーパルディアはクソです!あのような非人道的な侵略国家と手を結ぶというのは

将来の外交で汚点となります。むしろ!我が国はフィルアデス連合軍を支援しかの大陸に親日本政権を樹立すべきでしょう」

ある担当大臣は逆の提案をする。当然外務大臣と口論になる。この二人は外務大臣の座を巡って政治的にライバル関係に外交問題で

は対立する意見を言うのが日常茶飯事だった。
　それをいつもいつもなだめよい提案や取り入れていた総理だったが今回の決断は前回の政治的失敗の原因である性急に物事を決め過ぎた反省からひどく慎重な姿勢となっていた
「ところで防衛大臣はどう思う？」
「防衛省として懸念事項としてフィルアデス大陸は魔王領と隣接しています。ですからかの大陸が
　混乱状態に落ちった際には魔王軍の進出が行われる可能性があります」

　魔王その名前を聞いた途端首相は胃の痛みを感じた。目下のところ異世界最大の脅威であるダーレク
　大国に匹敵する異常な推定戦力を相手に戦う方法はまだないのだ。
「混乱はしないのはフィルアデス連合軍かパーパルディアかどちらだ？」
「パーパルディアでしょう、あの国が圧政によって大陸を支配したとしても『支配』はできています
　すなわち安定した秩序があるのです」
　首相の判断は同盟の方に傾いていたが国民受けの悪い判断なだけに国会マスコミ対策の時間が欲しかった
　そのため同盟の是非はもっと話し合ってからという決断で今回の会議は閉会した。

　中央歴１６４０年　２月８日　日本国　ある雑居ビルの一室
「・・・パーパルディアと同盟に関してどう思います？」
　パーパルディアの外交官は日本で有名な食べ物だという寿司を食べながらワイドショーを見ていた
　番組を見ているとパーパルディアの抑圧的な属領支配最近のアルタルス王国の侵攻が否定的に語られていた」
　我が国に対しての否定的な話ばかり聞くと陛下の恐怖による支配

は間違っているとつくづく思わせる
結局のところ力による支配は力を維持していかなければすぐに崩壊してしまう、現にダーレクに敗北をした結果がこの惨状だ。
外交官は祖国の現在の政策に否定的な感情を抑えてカイオスに現在の日本の情勢を伝えた。

中央歴１６４０年　２月１０日　パーパルディア皇国　エストシラント
「さて、全員レミールが手に入れたものを見たようだな」
ルディアスは参加者に意見を言うように促す。
「我が国としてダーレクが光翼人に神と崇められた存在であることを各国に周知することが出来れば
トーパの敗戦による国威の低下を覆すことができます。しかし諸外国は信じないでしょう」
「私も諸外国は信じないと思います。私自身も信じておりません。神々がこの世界に介入し続けることは
出来ないのはエルフの緑の神のように歴史や神話が証明し続けています。」
アルデのあと賛成する閣僚の発言が相次いだ。
閣僚たちが否定するのはルディアスも知っていた。しかしレミールが持ってきたものはパーパルディアの権威ある鑑定士によってラヴァーナル帝国が実在していた時に作られたものと結論を下していた
だからこそ聞かなくてはならないのだ。もしも本物の神だったらと？
「陛下、もしもの話ですがかの魔獣が本物の神でしたら我が国は滅ぼます。それは確実です
古のラヴァーナル帝国のような神々から逃げるすべをもっていません」
アルデはすがすがしく答えた、彼の想定とは異なるものだったうえに神と戦うのは軍略とは関係のない話だ

「真に憂慮すべきことは、かの魔獣がラヴァーナルによって製造された存在である場合です。
かつての魔王伝説のごとく。現在の魔王も大陸全土を焦土化するでしょう。ですから我が国はそうなる前に
情報と新兵器を開発して魔王に立ち向かわなくてはなりません」
アルデはそのために必要な措置について皇帝に進言しようとしたときに突如として扉が開き。
陛下!!アルーニの戦いにおいてわが軍は大勝!指揮官はアロイス閣下!
「閣僚会議中にそのような些事で我らの邪魔をするとはどういうつもりだ」
ある閣僚が将校をたしなめたも構わずに
アロイス閣下はフィルアデス連合軍の兵士を保護すると宣言し!負傷していないものを故郷に送り返しています!また、傷病兵の救護のために物資を流用しています!
「なんだと」と閣僚の一人がつぶやいたが一人を除いた会議の首席者全員が抱いた思いだった
なぜならば反乱軍は容赦なく殲滅するか奴隷化するそれが普段の行動であった。にもかかわらず皇族とはいえ一指揮官が勝手に保護を宣言し捕虜の解放と救護をするなど皇国が列強となって以来初めての出来事だった。その行動にはトーパの敗戦は相手が悪かったと思い始めていた面々も憤りを抑えられなかった。
もしもこの場にアロイスがいれば切れり捨てていたことが容易に想像できるほどに激高していたアルデに
再び叔父に屈辱を与えられ俯き震えているレミール。拳を握りしめ怒りを抑えるルディアス達の中で
一人カイオスは待ちに待った機会がやってきたことを悟ってた。
「陛下、アロイス将軍の独断は我が皇国の禍でありません。むしろ皇国を発展に向かわせる奇貨です」
カイオスの発言は一同の注目を集める、反乱軍を許すという愚行のどこに発展する要素があるのかと

知りたかった。
「わが、皇国は恐怖によって属領属国を統べています。恐怖の源は我が皇国軍の力によってです。
アルデ閣下、近い将来第三文明圏に干渉するミリシアル軍と戦いにおいてわが軍は無傷でいられますか？」
もちろん、そんなわけがないことはアルデ自身がよく知っている。技術、兵力に優れたミリシアル軍を対手にするには距離利点を最大限有効利用しゲリラ戦によって兵站に負担をかけ撤退させる方法しかないと軍の上層部の会議によって結論を下されている。だからこそミリシアルの侵攻を防ぐために強い皇国を見せつける必要があるのだ
「アルデ閣下、沈黙は我が皇国は無傷では済まないよろしいですね？」
カイオスの問いにアルデは沈黙で答えた。
「陛下、恐怖の源である皇国軍がミリシアル軍の手によって大損害を受けた時に属領は再び反乱を引き起こしミリシアルの先兵と化しわが方のゲリラ戦の効率は大きく下がります」
アルデが驚きの表情を浮かべていたのをカイオスは見逃さなかった。軍上層部のみが知りえているの情報を
カイオスが知っているのだから無理もない。皇国の改革派の第一人者となっていたカイオスに改革派将官が情報を流していたのだ。
「ですから、新しい道。恐怖ではなく尊敬される支配者としてのパーパルディア目指してゆかなくてなりません。そして現在アロイス将軍の独断ではありますが世界に我が国が変わろうとしているのだという姿を見せるのです。」
この話を聞いてルディアスがどう判断を下すのかはカイオスにもわからない。彼こそが恐怖による支配を推し進めている張本人でありその方針を変えるというのは精神的な苦痛を伴うはず。だが、少なくとも愚かではないことも確かだ。
ルディアスは長い沈黙の後
「カイオス。アロイスの行動を世界のニュースに流すのだ皇国が変わ

ろうとしている証としてな」
パーパルディアは歩みだそうとしている

幕間　マラストラスの計画1

中央歴１６４０年　２月７日　魔王領（ダーレク帝国　１ｐ＊６３４世界基地）　城塞都市トルメス

白いを何かがバラックの一群の上から舞い降りていた。

かつてこの場所に当たり前のように降っていた雪ではなく灰が

征服から一か月足らずで工場を建築するすべを知らなかった囚人たちを率いて

マラストラスは製鋼所の建築を成し遂げた。もちろんその偉業は過酷なノルマによって支えられている

結果として生じる人の死その副産物である遺体をマラストラスの発案で寒冷地帯に位置するこの基地の保温衛生管理の観点から有効利用、すなわち火葬所から出る熱をバラック群を温めるために使った。

マラストラスはダーレクから言い渡されたノルマを超える速さで構築しダーレクに自身の価値を示した。収容所の住民の有効理由の点でも褒められ結果製鋼所と関連産業の支配から魔王領全体で進められている巨大建築プロジェクトの総責任者を任せられることになった。ダーレクがある日を境により神秘性の高い計画に重点を移した結果でもあるが事実上魔王領の支配者となったのだ

製鋼所に設けられた監督所からマラストラスはバラックから入る囚人の群れを見ている、群れは苦痛と飢えに苛まれている。そのうちの何人かは工場から帰ってこないだろう彼らの苦痛と血から鉄は生まれその鉄は魔王領を成長させその成長はダーレクからの信頼ひいては彼の命を保障するのだ。

しかしながら魔王領の成長が進むにしたがって複雑化してゆく統治にマラストラスの能力は追いつけなくなっている、特に総責任者を任されて以来は特にだ。

部下が必要だ。マラストラスそう認識するとすぐに主の元へ向かうダーレクは遅滞を決して許さない

監督所から外に出るための通路を通れば製鉄所の設備や生み出されてゆく鉄の出す音鉄の匂い作業中の事故に巻き込まれた囚人の叫び声、溶けた鉄に焼かれてゆく囚人の体の匂いとマラストラスはここに地獄を作り出した。

完成した後も増築のための工事が並行して行われている製鉄所の外にはうつろな表情をした彼の護衛（ダーレクとの交信を続けた結果精神が崩壊した）と二体のゴブリンが主が来るのを待っていた。

「ダーレク様、我に部下を作り権限をお与えください」

マラストラスの嘆願に護衛は精気を失った顔をし続けている。ダーレクが自分の能力に

失望して殺すのではなかと心配になった時に

護衛の精気のない瞳が青く輝き憎しみに満ちた表情に変わったらダーレクが護衛に憑依したのだ

「ダーレクハ提案ヲ受諾スル」

「ありがとうございますダーレク様、して我に提案があるのです」

マラストラスはダーレクに自身の計画を打ち明ける

「我は人類農場管理計画を考案し、ある国を管理していました。人間どもの名前でエスペラント王国

我にかの国の侵略をお命じください。かの地より我は囚人と部下となりうる人材を集めてまいります」

「ダーレクハ提案ヲ受諾スル、出撃前ニ劣等種ノ捕獲兵器ヲ与エル。中央研究所ニ出頭セヨ」

そう言い残すと青い光が護衛の目から消えて元の生気のない顔に戻った。

旧魔王軍　本陣　現中央研究所

中央研究所魔王領の中心地にしてダーレクのにいるその場所は無数の檻が立ち並び無機質な監視塔が増築を繰り返す魔王領各地みある工場と収容所の複合体と寸分変わらない風景だった。

マラストラスはその中で一番大きいくほかの建物のようにコンクリート打ちっぱなしで装飾も何もない

掩体壕の入り口を抜けダーレクの待つ最深部。頭部に管が突き刺さり首だけにされた犠牲者たちの回廊を
通り抜けてゆく
最深部魔王領の中心地はほかの場所と同じく無機質極まりない。その無機質感を破るもの
６つの管がひとまとめにされけん引装置が付いたものがダーレクの隣に置かれている。
「学習装置ヲ装着セヨ」
学習装置それはお椀上に無数の突起がついている。かぶることによって知識と使い方を完全に学習できる現在の魔王領の発展に必要不可欠な存在だ
学習後その物体は多連装ロケット砲砲弾は昏睡ガス。そうダーレクはガス攻撃よって王国の住民をそのまま捕獲する計画だということを理解した。

ヘイスカネン　館
復活させたのはノスグーラだ。ダーレクではないしかし世界はその名前で魔王を呼ぶ
本国はその謎を現地にいる自分たちに調べるように命令を下した。
「本国の船どうした、船はどうなっているんだ」
ダクシルドは本国の相手に向かって繰り返し催促する。本国の答えは
現在パーパルディア海軍の活動が活発である、情報保全のため船は来ないという回答のみだった。
「アニュンリールの軍が来れば魔王に勝てると聞きましたがいつになる？」
ダクシルドの怒りの元である人物。彼らビーコン管理課のメンバーが大陸で生き延びられている
要因であるエルヤがいつものように質問する
ダクシルドはエルヤにあいまいな応答をしながら世界の支配者の

末裔である自分が下等種族の質問
　にいちいち答える羽目になるとは
　ノスグーラの使役が出来なかったことがケチのつき始めだ。魔王は使えず魔族制御装置は使い物にならない
　ポンコツだった。低級魔獣すら使役が出来ない自分たちは偶然狩りに出ていた鬼人族の手助けによって
　ヘイスカネンにひとまず安住の地を得たのだった。
「姫様、我らにも準備というものがりますゆえ少々お待ちください」
「おぬしはいつもそのようなことをいっておるな、見よこれを」
　エルヤに手渡された写真を見た瞬間ダクシルドの顔色が変わった
　そこにあったのは２０台トラックにけん引される多連装ロケット砲の車列だった。
　アニュンリールの基準から見て現用の兵器であるそれは接触した蛮族同然の魔王軍が使うにはあまりにも
　高性能である。（ダーレクの基準から見れば石器と変わらない代物だったが）
「これだけではないぞ、おぬしたちが我らに頼んだ魔王領の姿を映したものもあるのだ」
　手渡された写真に写っていたのはダクシルドにとっては見覚えのあるもの
　無数の檻と監視塔まるで祖国にぞんざいする下等種族区がそのまま写ってあるかのようだ
　まずい、これはまずい前に見たダレルグーラ城はよく言えば幻想的、悪く言えばただの中世城塞に過ぎなかった。それがたった一か月でアニュンリールに匹敵するほどの建築を複数も立てられるほどに急速に発展している。
　やはりノスグーラではなかったのだ。現在の魔王ダーレクそれはアニュンリール人にとってかつての
　帝国が崇めていた。世界を思うがままに作り替えるニ柱の神のうち殺戮を司る者の名だった。
　空間神は偽りの神々から帝国を救ったと伝えられているがこれま

で殺戮神（ダーレク）
はこの世界に不干渉を貫いておりその実在が疑問視されていた。
異様に発展している魔王軍の様子を見ればそれが殺戮神がこの世界に介入している証拠ではないか
これは困った。
ダクシルド達がこの辺境に来たのはエスペラント王国に埋まっているビーコンの発掘であって
神と戦うことではない。

アジ・ダハーカの復活を解くしかないなダクシルドは決断を下すと部下を集め
邪竜の復活の手配を始めた。